

大空を彩る200基の凧

# こうした凧揚げまつり

幸田町立中央小学校長 藤井 敦

こうした凧揚げまつりは、凧作り並びに凧揚げを通じて、町民の親睦を深め、幸田町のふるさとづくりの一助を担っている。

## まつりの歴史と概要

「こうした凧揚げまつり」は、昭和51年度に開催された「第1回新春凧揚げ大会」がそのはじまりである。平成10年度までは、大会に加えて「凧作り講習会」も行われていた。平成9年度から「こうした凧揚げまつり」と名称を変え、現在にいたる。

「こうした凧揚げまつり」は、地元の地区や企業のみならず、全国から総勢1000名以上が集い、凧づくりの技を競い合う光景が繰り広げられる。会場は、幸田町菱池の田園地帯である。電線や電柱のない水田地帯。凧揚げには絶好の場所と言える。

凧揚げ競技は、凧の大きさ、種類によって、小凧、中凧、連凧、全国、大



大凧の最終調整

## (2) 小凧、中凧、連凧、全国の部

長辺が70センチ未満の小凧、長辺が70センチ以上180センチ未満の中凧、連凧の部の申込みは、当日会場本部で受け付ける。伝統凧から創作凧まで自慢の手作り凧100〜200基が空に揚がる。

## (3) 大凧の部

競技には、地元地区、企業、学校、消防団など20団体から30団体に参加する。チーム員がそれぞれの配置で、凧や糸を支えてスタンバイする。凧を読み、指揮者の号令で一気に走り出し、揚げ糸を引っ張り凧を揚げる。丁寧なつくり、息を合わせたチームワークにより、凧は暴れず、静かに大空へ揚がっていく。引く、緩めるを繰り返すことで凧を操作し、最大150センチまで



連凧（アーチ凧）

糸を伸ばす。

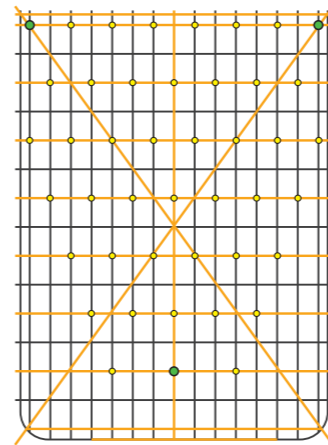
半年ほどかけて丹精込めて作られた大凧が空に舞い、彩りを添える姿は圧巻である。その美しさと迫力に見守る来場者から湧く歓声が、大凧制作者たちの心を満たし、親睦、交流が深まる。

## (4) ステージイベント

凧揚げ競技以外にも、ステージでの和太鼓の演奏や地元中学生によるダンスなど、来場者を楽しませるイベントが会場を沸かす。

## まつりの現状と今後

年々知名度が上がっていく一方で、近年では大凧部門の参加が減っている。理由としては、地元地区凧関係者の高齢化が考えられる。幸田町では、若い



大凧骨組

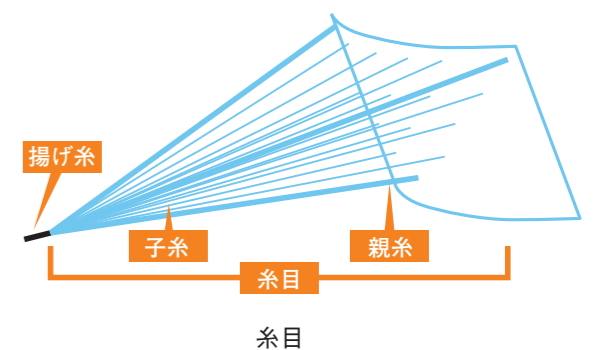
## 大凧とは

凧と部門が分かれている。なかでも目玉は、2畳〜16畳の大凧を揚げる大凧部門である。なお、長年の活動実績が認められ、平成24年度には経済産業大臣賞、平成25年度には文部科学大臣賞という新たな賞が大凧部門に加わった。

凧は「骨組」「凧紙」「凧糸」から成る。骨組は竹を材料とし、「真竹」と「女竹」という竹を使用する。真竹は、細く割って削りヒゴという状態に加工し、組み合わせる。柔らかくてよくしなる女竹は、ヒゴで組んだ骨組の補強をする。竹と竹は糸で縛って固定することができるだけ軽くすることが基本である。凧紙は和紙を貼り合わせて使用する。下絵をもとに墨で輪郭を描き、そして色を付ける。絵の具は、大空で太陽の光に最も美しく映える染料を主に使用する。骨組と凧紙はノリで密着させる。凧糸は、人が引っ張る「揚げ糸」、凧の上部両端と下部中央の3箇所につける「親糸」、凧全体につける「子糸」がある。凧と揚げ糸をつなぐ親糸と子



舞い上がる直前の大凧



世代にも凧の伝統を引き継いでほしいと、地元の凧づくり名人を講師に招き、凧づくり講習会を開催するなど、伝統の継承に力を入れている。その結果、平成27年度には新しい行政区（桜坂区）が参加、令和元年度は六栗区、幸田高校が参加するなど、新しい団体の参加があった。



大空を彩る大凧

に伝統文化である凧揚げに親しむ機会を提供し続けることを願う。

## 中央小学校凧クラブ

中央小学校には、クラブ活動の1つとして「凧クラブ」がある。平成4年度に発足した「凧クラブ」は、今年度30年目に入った。地元の凧名人を講師に招き、毎年凧1基を作成し、「こうした凧揚げまつり」に参加している。令和元年度には、大凧の部で教育長賞を受賞した。今後も凧づくりの伝統継承に貢献していきたいと考えている。

【資料・写真提供】

幸田町教育委員会生涯学習課  
☎0564・62・1111 内線195



中央小学校の大凧